

アウトドア王国の今



人気のラフティング(TAC とかちアドベンチャークラブ提供)

隣りに自然・ほっかいどう
オホーツクの海から流水が去る日を「海明け」といふ。目の前が広がるような語感のするこの言葉を真に美感できるのは、オホーツクに暮らす人々である。同様な意味で北海道の春を実感できるのは、私たち北海道に暮らす人間に限ら

れるだろうか。

雪が解け、福寿草が咲き、やがて梅と桜がいつしよに咲く春は、はじけるようにこの北の大地を花と緑で覆い、山を駆け登る。その合間を縫って残雪の山頂に憩い、ザラメの尾根を飛ばすのは、山スキーの名手でなくても至福のときである。

やがて夏鳥が帰ってきて若葉の森がひとときわさえずりでにぎわう。そんな自然が住まいの隣りにあるアイヌモシリ(人間の国・大地)、それが北海道である。6つの国立公園をはじめ23もの自然公園を抱え、毎年多くの観光客を自然の魅力で引きつける北海道であるが、当たり前すぎて私たちが普段意識しないのが、隣りに自然があるという暮らしの基盤にほかならない。

百数十年の短い時間の中で森を切り開き、谷を埋め、小山をならしてきた開拓の土地にも自然はあちこちに残され、今も私たちの四季の暮らしを豊かにしてくれている。事実、180万人の大都市になった札幌市の都心を抱える中央区には円山、藻岩山という大正時代に天然記念物に指定された原生林が日々多くの市民を迎えている。南区の奥山は支笏洞爺国立公園、東に位置する厚別区の一部は大都市近郊の平地林としては世界的にも珍しい道立自然公園野幌森林公園、といったように、私たちのアウトドアフィールドは手の届くところにある。

札幌にしてこつであるから、道内他都市のフィールドの豊かさは容易に想像されよう。

戦前からのアウトドア王国

このように恵まれた土地のもう一つの幸いは、中緯度に位置しながら美しい雪の降る積雪寒冷地という自然のせいたくな采配であらうか。北海道大学の教師や学生を中心に早くからスキーの利用と研究が進められた札幌では、昭和の初期から郊外の森の中にスキーヒュッテがい

くつも建設

され、山スキーと小舎の生活が市民の余暇に加わった。開催が期待された冬季

札幌オリンピックは戦争の波に飲まれて幻に終わったが、スキーに限らず冬のアウトドアスポーツが土地に根付いていたことが、時を経て、1972年の輝かしい成功に結実する。

また、札幌の奥山から日高山脈や大雪山に代表される原始的な山岳を擁する北海道では戦前から本格的な登山が取り組まれ、これもやがて1982年の北海道大学山岳部による厳冬期ヒマラヤ8千メートル峰(ダウラギリ 峰)の初登頂へと結実するのであった。

そうしたスキーや登山を中心としたアウトドアスポーツの興隆は、戦後の登山ブームやスキーブームとあいまってスキー道具や登山用品の開発を促し、一時期の札幌は用品の供給基地となっていたほどである。

今、札幌のアウトドアショップをのぞいて見ると、その後の変遷が手に取るようになる。伝統的な山とスキーの道具に加えて、スノーシュー、カヌー、キャンプなどのアウトドア用品であふれている。アウトドアの時代と市場は、専門的な集団の手から大衆の手に橋渡しされただけでなく、確実に日常のもの、まるで家電製品を手にするようにごく普通のものとなったのである。



札幌市中央区の原始林ウォッチング(タルカ提供)



「スキーのニセコ」を変えたカヌー(ニセコアウトドアセンター提供)



相次ぐ増水事故で入林禁止になった大雪山・クワウンナイ川

拡張するアウトドアライフシーン

この北の国でアウトドアライフが携帯電話のよつに手軽になった背景には、あふれるアウトドア用品の刺激のほかに、公共の資本でキャンプ場や温泉施設が急速に整備され、安く楽しく野外に出かける環境が整ったことがある。それらは開発に通常必要なマーケティングを必ずしも踏まえて整備されたものではなかったが、バブル崩壊後の時代の気分が後押しした。加えてアウトドア関連の雑誌、ガイドブックの相次ぐ発行、愛好者たちが情報を発信し交換するホームページやメーリングリストの普及が情報面でアウトドアライフの拡張を後押しした。

豪華なリゾートで長時間の滞在を楽しむ金と時間と虚栄心を持ち合わせないこの国の普通の市民にとって、身近なアウトドアライフが気心の知れた友達のようになるのは、ごく自然なことであった。

では、リゾート減びてアウトドアライフ栄える北海道かといえば、話はそう単純ではない。会員権ビジネス商法に頼って破綻したリゾートが格安の値段で第三者に買われ、自然ウォッチングからカヌー、ラフティング、ホーストレッティングといったアウトドア商品を装備して市場をソフトに開拓しているのが今日の北海道である。たくましく再生するリゾートにとってアウトドア関連ビジネスは、新しい「売り筋」、付加価値をもたらすものとして存在を大きくしている。

個人的な遊びのシーンで、流通のシーンで、またリゾートのシーンで、アウトドアライフは自己を拡張しているのである。

そうしたなか、冬季に客足が途絶えがちになる野外型の公共文化施設「札幌芸術の森」が、かんじきを提供して好評を得ているシーンは、素朴でほほえましいだけでなく、何か大切なものを暗示しているように思える。

自然の悲鳴は聞こえない

もしかすると、アウトドア症候群とでも呼ぶたいある種の熱病がこの麗しい北の国でも猛威を振るっているのかもしれない。

先端的なグッズやファッションで身をまとい情報が絶えずアンテナを張り他人が獲得した楽しげなことを追い他人とちよつとちがつたこともし成果に満悦して次に突き進む

いやな言い方になるが、アウトドアの愛好者にこうした傾向がないとはいえない。その根っこにあるのは日本人のまじめさ、成果を誇れないアウトドアは意味がないという強迫観念ではないだろうか。そうした「日本のガンバリズム」が地域に何を残すかと言えば、オーバーユース(過剰利用)とアクシデントに代表される厄介な問題だ。そこから地域は、

利用制限策を検討してできることから導入しそれが有効でないならハードをさらに整備しそれでもダメなら市場に警告を発し事実上、問題を先送りする

といったことになりかねないのが今日の現実だ。山好きの筆者が体験したことから象徴的な問題に少しふれよう。いずれも大雪山での話である。

事故が相次いだクワウンナイ川が入林禁止になり、荒廃した稜線の登山道は木道だらけになった。それはまだしも、5月連休に山スキーを楽しんでいたときのことだ。にわかにエンジン音が近づいてきた。林道のチェーンを切って進入したスノーモービルの一団である。カムイミントラと呼ばれる、自然公園法で特別保護地区に指定された「神々の遊ぶ庭」を我が物顔で楽しむ「アウトドアマン」に遭遇した日は、ことのほか美しく晴れていた。それは、普段聞くことのない自然の悲鳴を聞く日であった。

もっとのんびり楽しみたいアウトドア

自然観察からスノーモービルまで、あらゆるアウトドアライフを自由自在に楽しめる時代はかつてなかった。景気にでこぼこはあっても平和な経済大国ニッポンのシンボル「自然の王国北海道」の豊かさはだれも否定できない。しかしそこでは、私たちの行動の質と地域の持続的発展が試されている。

時計も図鑑も持たず、ただあるがままの動物として、空を渡る雲のように、針広混交林の森を歩いて行くのもアウトドアライフの楽しみではないだろうか。

NPO法人北海道観光パーシジョンアップ協議会
副会長 伏島 信治



かんじきで野外美術館を散歩(札幌芸術の森提供)